

福島県にてエゾホシクサを採る

土屋 守

エゾホシクサ *Eriocaulon monococcon* Nakai は文献によれば、北海道と奈良市黒髪山にのみその分布が知られている。かつて、大町市居谷里湿原から報告されたエゾホシクサはのちに、ミカワイヌノヒゲの変種とされた。

私は1992年9月5日に福島県南会津(細かい地名は省略)の湿原で本種を採集した。最近刊行された福島県植物誌(1987年)にも載っておらず、新産地として記録しておきたい。

一見したところ長い総苞片が目立ちニッポンイヌノヒゲのヤセ型のように見えたが、子房は一室、花柱と柱頭は一つであることや他の形質から、エゾホシクサであろうと思った。

東京農業大学生物学研究室の宮本太先生に確認していただいたところ、「種としてはエゾホシクサであるが、エゾホシクサは花苞や萼が白色であるのに対し、これは花苞と萼が帯黒色でありこの点がエゾホシクサとはやや異なる」とのご返事をいただいた。

この湿原では個体数は多いが大きなものは見られず高さ4cmから10cm位のものばかりで、他のホシクサ類は全く見られなかった。

ご教示いただいた宮本先生に深く感謝いたします。

然別湖のカラフトグワイは絶滅!?

角野 康郎

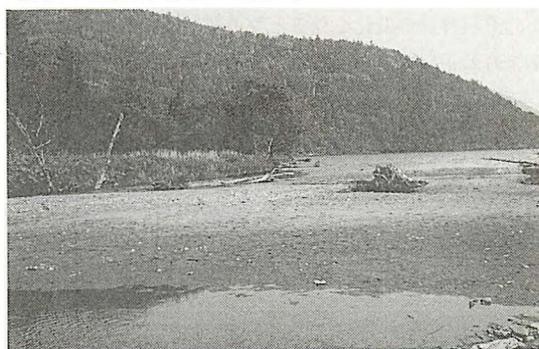
カラフトグワイ *Sagittaria natans* Pallas は、ユーラシア大陸の寒冷地に分布するオモダカ科の植物である。我が国ではきわめて稀な植物で、今まで釧路地方の2、3の場所と十勝地方の然別湖から記録があるにすぎない。そのうち釧路地方にはまだ生育が確認されているが、きわめて危険な状態であることについては別に報告した(角野・他、1992)。しかし、然別湖のカラフトグワイの現状については不明であった。

然別湖の記録は、北海道大学所蔵の標本に基づくもので1929年に採集された標本が残されている。1昨年、この標本を調べることができ、然別湖におけるカラフトグワイの生育地が、湖の北から流入するヤンベツ川の河口であったことが判明した。

昨年7月、北海道の水草を調査した際、カラフトグワイが生き残っているかどうかをぜひ確かめたいと思い、然別湖に足を伸ばしヤンベツ川の河口付近を調べてみた。そばにキャンプ場があって近づきやすい場所であった。現地を訪れてみてすぐにわかったことは、カラフトグワイが採集された60年前とは環境がすっかり変わっていることだった。

地形などから判断して、以前には河口の西側に沼(もしくは水が淀む入江)があったと思われたが、この部分が砂泥でだんだんと埋まり、今ではほとんど陸化していた。わずかに沼の名残りがあって、ホソバヒルムシロなどが生育していたが、この部分が陸化するのも時間の問題であろう。

湖の本体やヤンベツ川そのものは、どうみてもカラフトグワイが生育する環境ではないので、カラフトグワイは、多分、この沼地に生育していたというのが私の推測である。生き残っているとしたらこの沼の名残りか、その周辺であろうと思い注意深く調べてみたが、結局、見つけることはできなかった。少なくともヤンベツ川河口付近からカラフトグワイは消滅してしまった。然別湖は周囲を山に囲まれた湖で、水生植物の生育に適した沿岸帯のある場所は限られる。然別湖のカラフトグワイは絶滅した可能性がきわめて高い。



(上)ヤンベツ川河口、(下)陸化の進むかつての沼地。